

『他者の苦痛へのまなざし』（2003）スーザン・ソクタグ 第 4～6 章レジュメ

蒼白く、吊り上げた眉を寄せ、眉の上の皮膚には苦痛の皺 嘆きか叫びを上げている口は開いているように。歯ぎしりをし目を剥き、拳を握りしめ、足を曲げている。

死の苦痛にあえぐものたちをそんな風に描け。レオナルド・ダビンチの言葉をソクタグは引く（5章 p73）。

筋萎縮性側索硬化症を生きる人、ダビンチの指示通りに硬直し、痙攣する。眼を剥き、声なき口を開け、全身をこわばらせる。その人は言う。「ないめんはへいせいです」。だがそばで過ごす人はうろたえてしまう。表情と身体のコントロールを失うALSに伴う症状、感情失禁というのだと知っているから、その人の心の深奥、抑制の苦悶や怒りの表出だと受け止めてしまう。

憐れみは、「不当な」不幸に耐える人に対してのみ我々が抱く感情だとするならば、道徳的判断を伴うだろう。そうソクタグは言葉を続ける。戦場に散らばる欠損した身体、死体、恐怖の表情を写真に撮るといふことの歴史をソクタグはおさらいしながら、「眼を背けたくなるような」身体を流通させる意義を問うている。

戦争には「誰が引き起こしたか」という罪責性がある。病も、公害であれば「罪責」がある。写真は悲惨の抑止力として有効なのか？ 1章でそう問いを立てる。

「写真は一体何の力たり得るのか」。それが根底的な唯一の問いだと中平卓馬も書く。（ソクタグは9. 11同時多発テロの後に書いたが、中平はその30年前、1971年）

悲惨な身体があり、それを生きることは不幸である。ソクタグはこの本でこの条件を疑っているようには見えない。だがそう言い切ってしまうことにためらう。

写真・略

写真・略

E. Smith OKINAWA

ソクタグが肯定的評価を与えているユージン・スミスの水俣の写真（2章）。母の介助で入浴する胎児性水俣病患者の女性の写真は、今は封印されている。その写真は公害の悲惨を世に知らしめたが、「公害は悲惨だ」がいつしか「あんな生は悲惨だ」とみなすことに転嫁したのではないかと、水俣病に関わる原田医師は指摘している。水俣病が世に知られた後に発覚した新潟水俣病では、胎児性水俣病患者が発生していない。妊娠中の女性が胎児のリスクを考慮し中絶したためではと原田医師は推測している。

眼を背けたくなることを突きつけること。ソクタグは戦場写真を「できれば知りたくない事物を現実ものとする手段」という（1章）。

世界の悲惨を撮ることと、美しさ／スペクタクルの対立について、ソクタグは5章でもサルガドの写真への批判を題材に扱っている。

ここでも「写真は戦争の抑止力になるか」がまた問われている。サルガドは難民を撮った。同じように医療難民にも問える。「ALS患者の映像は尊厳死法制化の抑止力となるか？」

NHKスペシャルで人工呼吸器ユーザーのALS患者が登場しました。初めて見る人は怖くなってチャンネルを変える、ロックト・イン（閉じこめ症候群）や病の先は悲惨だと心配して呼吸器付けずに亡くなる人が出やしないか。そんな心配の声もある。これは眼を背けたくなる身体だと社会が受け止めるという心配に基づく。これは「社会のまなざし」をどう評価するかによる。

ALSを取り上げたNHKドキュメンタリーの質が良いかどうかの評価は、人工呼吸器を付けて生きることを肯定する立場か、反対し尊厳死を法制化する立場で見方は変わるという意見がある。これはソクタグが1章で述べた戦場の悲惨が戦争抑止力とはならず、「だから戦争を続けて不正と不当な暴力を倒さねば」と、戦争継続の装置になると同じ問いを含む。死にたいから語義どおりの印象を受けるか、死にたくない一を汲み取るか。

人工呼吸器を付けてキラッと生きる映像があったとする。あれは全てじゃない、カメラに映っていないリアルがある、本当は介護大

変なはずだ。またはあの人は特別で、テレビに出ない大多数の人のリアルは、悲惨で苦しんでいるはずだなどと、映らない背後の「リアル」を探す作用も働く。

## 写真・略

サルガド題材の5章は、「他者の苦痛へのまなざし」の中核部分である。

- ▼ 苦痛に満ちた現実を民衆に突きつけたら、人々は深く感じるはず。→何を？ 倫理感を？ 写真だけでなく、文学でも絵画でもあるリアリズムという運動。
- ▼ ①美しすぎると偽物に見える。言い換えると、受け手のマスメージから逸脱すると本物らしくない。例)本物のピストルの発射音ドキュメントといわない②苦しんでいる人をネタにして美をつくることは冒瀆的。失礼。よくない
- ▼ 悲惨な写真が大量消費されるとなれっこになって、効き目なくなる。インパクト消える。まあ忠臣蔵とか、反復ゆえに涙する面もあるけれど。
- ▼ 情緒の搾取。写真は被写体から「奪う」。収奪する。
- ▼ 観る側の感情は、写真の回りに結晶する。知性をまひさせる。他の理解と記憶の形式を追いやる。  
→記念碑。記念館建設。戦場写真を撮る行為はピラミッド建設の欲望と似ている。記憶装置。歴史修正主義 ここにいるわたしを覚えていて。
- ▼ 罪なきものの死。虐殺の歴史を記憶すること。それでわれわれは、誰を責めたいの？

中平卓馬の同じ問いへの言葉。

写真家はあらかじめ捕獲され、承認され、それゆえに化石になった(意味)を、自らの意識の内部から追放しなければならない。

意味とは、貧しい人を撮ることによってこの貧しさを追放できるとか、ベトナムの子どもたちを撮ることで戦争に反対するのだといった傍観者の道徳律を含む。意味の図解を写真から追放しろ。

戦場に行って、戦場らしさに沿った写真を見せられても驚きはしない。沖縄に行って B52が飛び立つ下の沖縄の少女の写真を撮って見せられても驚かない(1970「同時代的であるとは何か?」)。

映像の記録性への機械的信仰は、抜きがたく我々に植え付けられており、映像、写真の問題になると、いとも容易に武装解除されてしまう。ドキュメントは偽造、複製が懲役刑を持って報いられるところのもの。

眼は下界へ通じる透明な窓ではなく、世界からわたしを遮断するシェルターに変わる。カメラは世界をオペレートする思想を具現化している(1973「なぜ植物図鑑か」)。

## 写真・略

◆陳腐化。メディアで反復される悲惨イメージ。

ここでそれを乗り越える写真運動やブームについてソクタグは触れてない。きっと知っているのに。

70年代からの「ニューカラー運動」。日本の戦場写真で流行した・今もよくある「戦場でみつけた子どもの笑顔」／写真のジェントリフィケーション・・・

→罪責性を「戦争の悲惨さ」とするか、「ユーゴ空爆は NATO の誤り」のように問責するか。後者は良い戦争と悪い戦争があるという地平に立つが、前者では、遂行する側(国)が誰かを不問にするので日本メディア的には受けがいい。

◆ 報道では陳腐化したはずのもの・美術館に収容されていたものを、ベネトンのトスカニーニの広告写真が90年代に扱い衝撃力を持ったことに留意。LIFE廃刊、グラフ誌廃刊・・・

## 写真・略

### 6章 同情について

かわいそう。だけど私にできることは何もない。仕方がない。やむをえない。

遠くで苦しんでいる人がいます。

わたし同情してるから、このひとたちを苦しめている加害者の共犯じゃないよ。

「同情は、われわれの無力と同時に、われわれの無罪を主張する」(P100)

悲惨な状況にある人の映像が流れたので、テレビのチャンネルを変える。

眼をそむける。困っている人は一杯いる。わたしに助けることは、どうせできない。

映像の洪水はそういう自己弁解を招く、良心を刺激しなくなる、不感症になるとソクタグは心配する。

けどそうかなあ、映像が私も加害者側にいるのだ、無関係ではないんだと、気づききっかけになるとも素朴に言っている。

◆ 援助者の視点、ボランティア、ボランティアせよ、という無言の命令

差し出せと、安全なところで傍観せず、「何かを差し出せ」という無言のまなざし ちとレビナス

ソクタグは、映画やテレビの過激な暴力表現の圧倒的な量に、ちびっ子が慣れっこになっていると又ここで書いている

## 写真・略

メディアがばらまく悲惨の写真により、消費者が起こす同情の内容についての別の例。

悲惨のスペクタクルの消費者は、悲惨の現場に対する「呪われた眼」の共犯者であることを拒否する。

難民の少女が飢え死にするのを待つハゲタカの写真はピューリツァー賞を受賞した。掲載後、「なぜ少女を助けなかったのか」と激しい非難が起こった。「助ける措置は取った」と弁明したが、写真家はその後自殺した。

戦争の犬たち。戦場写真家への蔑称。

「戦闘地区で『戦争ツーリズム』として目撃する人々の努力を嘲笑することは繰り返し現れる現象で、そのような嘲笑的態度は、職業としての戦争写真をめぐる議論にも入り込んでいる」(7章、P111)。低俗で悪趣味。商業主義の屍を漁る行為  
「あんたは爆弾が炸裂したら、もっとたくさん死体が写せると待っているのか？」

ソクタグはユーゴ紛争の戦場に立った。アメリカのジャーナリズムの内側にいた人である。

カメラマンが自らの身を危険にさらしていること、そのことを死体に向けてシャッターを切ることの免罪符とする言い方としている。或る意味の英雄主義？ 戦場で命を落としたロバート・キャパ、取材で工場側の暴力でケガしたユージン・スミスへの敬意。

探検家について、研究者についての古い批判がカメラマンにもあてはまる。

「俗悪と凡庸を作り出した当の本人が、それらを覆っている粉飾を聴衆の前で剥ぎ取ってみせる代わりに、2万キロを踏破したということで、それらを聖化してしまう」(悲しき熱帯)

蛮勇だとして非難もされる。イラク戦争時の日本人ジャーナリスト救出・日本人質殺害・・・

また写す側と写される側の格差を埋める倫理として、対象への接近、カメラマンと被写体との距離感が、写真外の物語として持ち出される伝統が写真業界・メディアにはずっとある。D・アーバスのフリークス写真や、ユージン・スミスの水俣での生活。

対象への密着は良いことのようにあるが、取材対象者の同意なきものに、あきらかに撮られる側が不快であろう写真に・・・消費者側は批判的になる傾向がある。呪われた眼の共犯者であることへの抵抗感が、写される側への自己決定問題に拡張されている。映像の消費者も、相手の同意が得られている写真の方が罪悪感なくて安心する。好まれる写真がシフトしつつある。

そしてこの傾向は、距離の近い場で発生した惨事での遺体写真は伏せられ、遠いアフリカ、中央アジアなど第3世界の写真での厄災では死体写真が掲載されるという植民地主義の目線ともなっている。ベトコンの処刑写真、キリングフィールド。「ジャーナリズムは、異国的な土地、つまり植民地の人間を展示するという幾世紀続いた慣習を継続している」(4章)

→このことは、カメラマンを「異境」へと駆り立てる理由でもある。

戦場カメラマンだけではない。誰かを「悲惨な境地」だとして調査し、調べて伝える時に、伝える側は、対象者の同意を要件として求められるようになっていく。撮ることの暴力性に過敏になる傾向は、ネット環境の拡がりの中で、ばらまかれる恐れと一緒に強化されていく。

ちなみに6章では、

耐え難く、かつ恍惚とする苦痛

① プラトンの引用。死体を見たがる呪われた眼

② バタイユの逸話。百刻みの刑で生きながら寸断されつつある中国人死刑囚の写真

→自分を強く麻痺させること。どうしようもない存在を認めること などとソクタグは言及してはいるが、ちょっと触れただけ。

◆ 少し本のお題を言い換えてみる。

他者を悲惨とみなす

「奇形にされ視力も聴力もない娘をあやす水俣の母親の写真は、マリアの顔立ち（5章 P78）

サルガドだけでなく、ユージン・スミス の 作風も、キリスト教伝統のスペクタル要素の中にある。「苦しみに満ちた現実」の哀しげ効果だとは言う。誰かの生を、悲惨だと名指しすることの暴力性には言及していない。

報道写真論と対人ケアをつなぐ

ソクタゲ→悲惨を語っているようでありながら、死体／身体障害・ユニークフェイス写真について語っている

戦傷の身体と、病気や障害の身体は違うという立場がある。人為の被害者だから？ 帰責性

・日本の制度も、戦争による障害年金（軍人恩給）が、ふつうの障害年金より何倍も高額給付。

・脳性まひが、出産事故補償の制度化によって、人為ミスとされつつある

対人ケアで前回の身体論研究会で語られたこと

・おかしな人がいる。人格障害や精神障害、発達障害。気になる

・演劇という装置を通して語りを引き出すと癒される。

対人ケア／援助職の人が、専門性の中で「引き出せていない」こと。

「語り」→語らせたい。

弱者のためになっている vs 弱者が喜んでいるように見える

★相手の幸せ度の計測をなぜ援助職がしたがるのか。「何かをしてあげたい」という欲求

実は、援助する私の「やりがい」探しでは？

→援助職の人が仕事にやりがいを求める構図

→話していると違和があるが、その人の生きづらさは助けがいない人

→「悲惨だから助けてあげたい」とみなす

異なる人を「異文化」ということの危うさ。「キラッと生きる」と言ってしまう暴力性。

ほんとはなだらか。文化は、アイデンティティと関係しているけれど、これは境界線を引く作業。

「ブラック・イズ・ビューティフル」を白人がいうとおかしい。

素敵だと外からいうことの差別性と、悲惨だとみなすことは平行関係にある。→オリエンタリズム／神秘化

#### ◆以下引用です

「ハゲワシと少女」の写真で1994年度のピューリッツァー賞・企画写真部門賞を獲得したケビン・カーター氏(当時33)＝フリーカメラマン・南アフリカ出身＝が7月27日、ヨハネスブルグ郊外で自分の車のなかで遺体となって発見された。

地元の警察では自殺とみている。自殺の原因は不明で、ピューリッツァー賞受賞と関係があるのかわからない。受賞作「ハゲワシと少女」は、内戦と飢餓に苦しむアフリカ・スーダン南部で撮影された「飢えでしゃがみこんでいる少女の背後にハゲワシがただずむ」絵柄で、同じ地球上の残酷な現実を切り取った写真である。

ところが、この写真が、ニューヨーク・タイムズ紙(1993年3月26日付け)に掲載されると、「なぜ、カメラマンは少女を助けなかったのか」という非難の声が巻き起こった。NHK教育「メディアは今」(1994・6・30)は、カーター氏へのインタビューをはじめ、多くの学者・ジャーナリストにコメントを求め、一枚の写真が提起した問題を検証した。そこには、人間の尊厳優先かプロ意識の徹底か、イメージだけが注目される写真の危険性などジャーナリズムの根幹に関わる多くの教訓が含まれていた。

#### 【カメラマンの告白】

スーダン南部に潜入して飢餓の現実を克明に取材したカーター氏は「ハゲワシと少女」の写真撮影の前後をこう語った。「国連などの食料配給センターから500メートル離れたところで一人の少女に出会った。こんな風にうずくまって(真似をして見せる)必死に立ち上がろうとしていた。その光景を見たあと、いったんはその場を離れたが、気になってもう一度引き返した。すると、うずくまった少女の近くにハゲワシがいて、その子に向かって近づいていった。

その瞬間、フォトジャーナリストとしての本能が“写真を撮れ”と命じた。目の前の状況をとても強烈で象徴的な場面だと感じた。スーダンで見続けてきたもののなかで、最も衝撃的なシーンだと感じた。自分はプロになりきっていた。何枚かシャッターを切ってからもういい写真を撮るのにハゲワシが翼を広げてくれないかと願った。15分から20分ひたすら待ったが、膝がしびれはじめ諦めた。起き上がると、急に怒りを覚え、ハゲワシを追い払った。少女は立ち上がり、国連の食料配給センターの方へよろよろと歩きだした」

「この後、とてもすさんだ気持ちになり、複雑な感情が沸き起った。フォト・ジャーナリストとしてものすごい写真を撮影したと感じていた。この写真はきっと多くの人にインパクトを与えると確信した。写真を撮った瞬間はとても気持ちが高ぶっていたが、少女が歩き始めると、また、あんたんたる気持ちになった。私は祈りたいと思った。神様に話を聞いて欲しかった。このような場所から私を連れ出し、人生を変えてくれるようにと。木陰まで行き、泣き始めた。タバコをふかし、しばらく泣き続けていたことを告白しなくてはならない」

しかし、彼は、一日に15人から25人は死んでいく村で、この少女がその後どうなったか見届けていない。

#### 【是非論】

1994年4月、この写真が200点の候補作品の中からピューリッツァー賞に選ばれると、改めて大きな反響を呼んだ。受賞作の写真に掲載したフロリダの新聞社には「少女を見殺しにしたカメラマンこそ本当のハゲワシだ」「ピューリッツァー賞は取材の倫理を問わないのか」といったきびしい批判が寄せられた。番組で紹介された識者の見方は次の通り。

○ビル・ライタム氏(在米アムステルダム・ニュース代表)＝否定

「この写真はジャーナリストに必要な良心が感じられない。写真をとることが大切なのか、目の前で起きている事が大切なのか、それが問われている」

○ステファン・アイザック教授(コロンビア大学)部)＝肯定

「ジャーナリストは倫理的に考えて、取材しようとしている状況を変えることは出来ないという責任がある。カメラマンがハゲワシを追い払うべきだとは思わない。少女の命を救うことは彼の仕事ではない。彼はねぼって子どもが死んでハゲワシが肉をついばむところを見届けるべきだった。残酷に聞こえるかもしれないが、それがジャーナリストの役割だ」と断言し、カーター氏を擁護する。

○吉岡忍氏(ノンフィクション作家)＝肯定

「ジャーナリズムは写真に限らず、文章に限らず罪深い職業だと常々思っている。誰かが不幸になっている、惨事に巻き込まれている、その上に成り立つ職業。自分が同じ状況に置かれたらどうするか。やっぱり撮る。徹底的に見る。鬼になって見る。絶対に目の前に起きていることから目をそむけない。これを自分に課している。人間としておかしいじゃないかといわれるが、『可哀相だ』という情緒的反応を起こさないように努力する。怒り、暗澹たる気持ち。一体、飢餓は何故起きるのか。問いつめていくうちに、やがて、それを撮ることが飢餓の現実を変える確信につながるならば、ジャーナリストとしての自分の倫理観との緊張関係のなかで仕事をする。苛酷な現実を見た時、誰も強制しないのだから、確信が持てなければ撮らない」と理解を示す。